

石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成 24 年 6 月 30 日発行 第 12 号

奈良県立大と合同防災研修実施！

去る 5 月 2 日、奈良県立大学の麻生憲一教授とゼミ生 8 人がはるばる奈良県から石巻を訪問しました。この日、同ゼミ学生と石巻専修大学の丸岡ゼミと庄子先生は、自家用車とレンタカー計 5 台で市内の視察をしながら、合同防災研修を実施しました。

JR 石巻駅前で待ち合わせた私たちは、まず、石巻の老舗料亭「滝川」の旧店舗へ向かいしました。この旧店舗は旧北上川沿いにあり、二階まで津波が到達した場所です。そこで若女将の阿部さんに被災体験を話してもらいました。地震が発生し、強い揺れによって食器などが割れ危険な状態でしたが、阿部さんはなんとか安全を確保しスタッフを避難させました。そしてご自身は、子供を迎えに小学校へと向かいしました。なんとか小学校まで辿り着き、津波から逃れました。

ここで重要だったのは冷静に、迅速に避難という対応をとれたことです。津波を想定して避難していなければ危険だったことは言うまでもありません。ここから学んだ教訓は、大きな地震が発生したら高いところへ避難することです。津波被害の大きかった店舗は当面使用できないため、現在、料亭は市内のサンプラザホテル一階で営業を再開しています。

次に石ノ森漫画館やハリストス正教会がある中瀬へ向かいしました。ここで石巻側から、「今、津波が来たらどこへ逃げるか」という防災クイズが出されました。奈良県立大の学生さんの何人かは、川向こうに見える四階建てビルを指しました。しかし、今回のような津波の大きさだとたとえ四階建てのビルとはいえ安全というわけではありません。また、避難に自動車を使うべきかどうかは、簡単に正解を決められない問題です。

実は今いる中瀬からはすぐ近くに山があったのですが、誰もが山の存在には気がつきませんでした。また、中瀬の私たちの目の前の萬画館の上階は津波被害を免れた場所でした。津波の避難場所は、遠くよりも近くで



避難訓練

高いところ、が基本のはずですが、そういう意識の方はまだ少ないのだと思います。津波というのは現場に来てみないと、その大きさや避難経路はイメージしにくいものです。津波対策がじゅうぶんでなかったことが、今回の震災の被害の大きさにつながったと言えます。

その後、津波後の火災被害が大きかった門脇小学校を訪れました。車のガソリンなどで燃えた校舎は真っ黒く焼けただれ、震災の恐ろしさを物語っていました。そこで自動車乗車中に津波に襲われた私が体験談を話しました。話の中で私が特に強調した部分は、住民の津波に対する意識の低さです。今まで津波警報が鳴ったことは何度かありましたが、防波堤を越すことは一度もありませんでした。そういったことから今回も津波を軽視し、逃げ遅れてしまいました。この経験を伝えることで、少しでも防災意識が高まればと思います。

次に、石巻日日新聞社前から日和山へとつながる坂道へと向かい、津波を想定して防災訓練を行いました。津波から逃げるため坂を急いで上るというものでした。北海道の奥尻島で高校生が実施している避難訓練を参考にしたものです。が、ここでも人工的想定を置かざるを得ないため、参加者の実感は乏しかったようです。また、坂道を上る途中で横道から車が出てきてしまうというハプニングもあり、防災訓練を行うにあたって安全確保上の今後の課題となりました。

続いてサンプラザホテル内「滝川」での昼食、いしのまき NPO センターでの復旧復興状況の聞き取り、日和山からの視察、NPO 法人オンザロードの案内による湊 2 小視察の後、私たちは石巻専修大学へ向かいしました。

大学の図書館では、津波被災地の震災前の航空写真に基づく 3D プリンタの立体模型を見学しました。細部まで再現された精密な模型と実際に見た光景との違いに皆が驚きました。また、若月昇教授が震災当時の石巻の様子を細かく解説してくださり、より石巻の状況への理解を深めることができました。

今回のこのプログラムは防災研修を主としたものですが、実際の避難訓練はとても難しいと感じました。どうしても「想定」の訓練になってしまうため、いまいちピンとこない部分があり、緊迫感に欠けてしまいます。当日回答してもらったアンケートを見ると、奈良県立大学の皆さんは、防災クイズや避難訓練よりも、被災体験談を「とくに良い」と感じたようでした。

この日の試みから、被災地を訪れ被災者の体験談を聞くだけでも防災意識は高まるのではないかとヒントが見つかりました。今後、次の大災害に活かせる新たな防災研修プランを考えていきたいです。

(金津甲樹)



門脇小学校前

岡田劇場、再び

石巻市街を流れる旧北上川の河口に兩岸と橋でつながれた中州、中瀬（なかぜ）があります。その中瀬にある市民の娯楽の拠点が岡田劇場です。

岡田劇場は江戸時代の千葉座を起源としており、戦前までは芝居小屋として、戦後は映画館として、市民に娯楽を提供してきました。

芝居小屋が前身のため、戦前は東京の歌舞伎を模した建物であったことが写真として残されています。また、映画館となった戦後でも舞台は維持されており、舞台の地下へもぐると、回り舞台の装置が残されていました。

近年、映画でお客を集めることが難しくなると、岡田劇場を経営する(有)オカダプランニングは、経営の柱を演歌など劇場外の興行に移してきました。

一方、平成 11 年秋には、劇場に思いを持つ市民が「岡田劇場がんばれ会」を結成し、名画や舞台を軽食とともに提供する催しを行うようになりました。

平成 23 年、3 月 11 日、午後 2 時 46 分、東日本大震災が起き、大津波が石巻を襲いました。

地震発生時、経営者の菅原聖（きよと）さんは、石巻西部にある津波の被害が少ない蛇田地区にいましたが、劇場と家族、社員の事が心配になり、車で中瀬に向かいました。途中、警官に「津波が来るぞ」と止められましたが、それを振り切り、劇場に走りました。

建物は無事で、中には誰もいませんでした。

劇場を後にし、川の西向こうの自宅に知人 2 人とともにいると、目の前で津波が岡田劇場をのみ込みました。と思うと同時に、自分たちも波にさらわれ、そこから約 700 メートル上流へ流されました。

社長は何とか岸に流れ着きましたが、一緒にいた 2 人は津波の犠牲となりました。

その後、社長と家族、社員の無事がわかりましたが、劇場の建物は、今、残っていません。舞台も、300 余りあった客席も跡形もないのです。

市民に楽しみを提供してきた岡田劇場を再び、と願う市民は少なくありません。が、今会社は、プレハブの事務所と借りた会場で映画興行などを行っています。

それでも、皆を楽しませたい気持ちは変わりません。震災後一年を間近に控えた平成 24 年 3 月 10 日には、「岡田劇場がんばれ会」の主催により、石巻専修大学でアニメ映画「フレンズ もののけ島のナキ」の無料上映会を開催しました。

映画館の建物はなくても、オカダプランニングには興行に必要な芸能界や市民との人脈が残されています。これを頼りに、これからも石巻市民に楽しみを提供し続けてもらいたいものです。

（菅野裕太、鈴木成仁）



津波被災前後の劇場（平成 15 年 4 月・平成 23 年 4 月）



撤去前（5 月 4 日） 撤去後（6 月 30 日）

巨大缶詰、撤去へ…

津波により石巻市では、民家の他にも様々な建造物が被害を受けました、その中の一つ、株式会社木の屋石巻水産の魚油貯蔵タンクの撤去が決まり、中に残った魚油を取り除く作業が始まりました。

この貯蔵タンクは鯨の大和煮をモチーフとしたデザインで、石巻の水産加工産業のシンボルとして多くの市民に親しまれてきました。

しかし、去年の津波で会社から 300 メートル離れた道路に運ばれ、中央分離帯上に横倒しになってしまいました。その赤く巨大な見た目と、大きく凹んだ形状が、見たものに津波の壮絶さをひしひしと伝えてきます。

私たち丸岡ゼミでは他県の大学の教授や学生を対象に、石巻の街を案内する活動を行っています。6 月 16 日には東京の専修大学、東洋学園大学、日本計画行政学会の先生方と学生の皆さんがいらっしゃいました。そのときご案内をいただいた、木の屋の社長の木村さんにお話をうかがうことができました。

市では、津波の恐怖を後世に伝えるモニュメントとしてタンクをそのままの状態で保存する提案が挙がりました。木の屋さんにもそういう気持ちがあったようです。

しかし、元の工場に運ぶ作業に約 2000 万円のコストがかかることと、現地の一部の住民の間では「震災を思い出すので解体してほしい」という声が挙がったことから、その結果タンクを解体することが決まりました。

水産加工会社では、タンクをいすやテーブルに加工し保存する計画を立てており、別な形で多くの人に津波の恐怖を知ってもらおうとしています。

このような新たな町としての復興と地域住民の心情の問題は多々あり、町づくりの大きな課題となっています。これを機に、私たちも石巻市の今後のありかたについてもう一度よく考えるべきだと思いました。

（吉城翔太郎）

ボランティアの提案・要望

（平成 23 年 9 月実施アンケートより）

◇ボランティア・センターへ

「リーダーの資質向上（何となく経験者が勝手に仕切る）」（山梨県・40 代男性）

「もっと現場ニーズの発掘を」（神奈川県・60 代男性）

◇石巻専修大学へ

「もっと施設を提供できればいいのでは」（東京都・30 代女性）

—大学内で検討させていただきます（編集部）